

Bhavasamkrāntisūtra のプダク写本

津 田 明 雅

1. はじめに

一般にプダク写本 (F) は現存の他の写本版本にはない独自の読みを示すことがしばしばあり、また古形を保持するともいわれ重要視されるが、*Bhavasamkrāntisūtra* (*BhSS*) に関しても例外ではない。プダク本の読みは他本のチベット訳と大きく異なる個所がいくつかあるだけでなく、近年校訂本が出版されたサンスクリットとも異なる点がいくつかある。本稿ではこれら 3 者を比較し、プダク本が古い翻訳なのか、さらにはオリジナルに近い読みを伝えているのかどうか検証したい。

BhSS は大乘經典といわれ、中観派、唯識派いずれの学派によっても経証として引用される、比較的短い經典である。散文部分と偈頌部分とからなり、前者ではタイトルどおり、輪廻的生存における行為の連続性について説かれ、後者ではことばなどの観点から空の思想が説かれる。本経と同名の *Bhavasamkrānti* (*BhS*) という、Nāgārjuna に帰せられる論書があるが、*BhSS* の偈頌部分はこの *BhS* 第 12-18 偈と一致する。この偈頌部分に関しては、*BhS* ではなく *BhSS* からとして引用する典籍が多く、本經典のほうがより知名度が高く、広く流行していた様子がうかがえる。両者の関係については拙稿で触れたことがあるが、成立年代に関してはその前後関係を含め確定にはいたっておらず、*BhS* を取り込んで現行の *BhSS* が 350 年頃成立した、という仮説のもとに研究が進められている¹⁾。

2. テキスト

BhSS のテキストには近年校訂本の出版されたサンスクリットと、チベット訳が 2 種、漢訳が 3 本存在する。チベット訳では、次に示す 9 本 (Tib.1) では奥書きに Jinamitra と Dānaśīla と Ye śes sde の共訳²⁾ とあるのに対し、プダク本では翻訳者名が記されず、テキスト自体にも他 9 本とは異なる点が多くある。

〈サンスクリット〉 Vinītā (2010) pp. 414–447.

〈チベット訳〉 Tib.1: Sher dkar (L), Peking (P), Cone (C), Tog palace (S), Derge (D), Narthang (N), Tokyo (T), Urga (U), lHa sa (H); Tib.2: Phug brag (F).

〈漢訳〉『仏説大方等修多羅王経』(菩提流支訳, 大正 575), 『仏説転有経』(仏陀扇多訳, 大正 576), 『仏説大乘流転諸有経』(義浄訳, 大正 577).

〈本経を引用する典籍〉(すべて先行研究に言及あり)

(散文部分): *Madhyamakāvatārabhāṣya* by Candrakīrti (ca. 600–650), Skt. (*MAVbh*)³, Tib. (*MAVbhT*)⁴; *Prasannapadā* by Candrakīrti, Skt. (*PP*)⁵; *Prajñāpradīpaṭīkā* by Avalokitavratā (ca. 700), Tib.⁶; *Śikṣāsamuccaya* by Śāntideva (ca. 685–763), Skt. (*Śkṣ*)⁷; 『因縁心積論開決記』by 法成? (9世紀前半), 大正 2816 (開)⁸; *Bodhicaryāvatārapañjikā* by Prajñākaramati (11世紀), Skt. (*BCP*)⁹; *Catuhstava-samāsārtha* by Amṛtākara (13世紀?), Skt. (*CSS*)¹⁰.

(偈頌部分): *Bodhisattvabhūmi*, Skt. (kārikā (k.) 2 の引用); *Vyākhyāyukti* by Vasubandhu, Tib. (k. 1, 2, 3); *Āryaḥṇavyūha-nāma-mahāyānasūtra*, Tib, 漢訳 (k. 2, 1); *Āryaprajñāpāramitāsamgrahakārikā-vivaraṇa* by Triratnadāsa (ca. 480–540), Tib, 漢訳 (k. 2, 3, 1)¹¹; *Tarkajvālā* by Bhāviveka (ca. 490–570), Skt., Tib. (k. 2); *Prajñāpradīpa* by Bhāviveka, Tib. (k. 7, 7, 6, 2); *Prasannapadā* by Candrakīrti (ca. 600–650), Skt. (k. 7, 6); *Prajñāpradīpaṭīkā* by Avalokitavratā (ca. 700), Tib. (k. 5, 7); *Śikṣāsamuccaya* by Śāntideva (ca. 685–763), Skt. (k. 3); *Tattvasamgraha-panjikā* by Kamalaśīla (ca. 740–795), Skt. (k. 2); *Abhisamayālaṅkāra* by Haribhadra (ca. 800), Skt. (k. 1); *Sugatamatavibhaṅgabhāṣya* by Jitāri (10–11世紀), Tib. (k. 2).

3. プダク本と他本, サンスクリットとの相違

次の表はサンスクリットと2種のチベット訳との違いを比較したものである。注記¹²には3本の漢訳と引用典籍の読みも挙げた。(表中のアミかけ個所は他2者とは異なるテキストを示す。注記中の*は筆者による訂正文字。)

これらのうち, b と d では Tib.2 (F) のみが異なるが, これらは漢訳3本に支持される。漢訳は6世紀前半ないし7世紀初めのものである。漢訳のうち特に大正577はFとの一致をみせ (a, b, d, e, g, i–o, q; 特に a, j, n, q), テキストは全同ではないものの, Fが大正577を参照した可能性は否定できない。また, p ではFは*sarva-であるが, 正しくはSkt. や Tib.1 の tattva- である。これはFの誤訳が後に訂正された例といえるのではなかろうか。同様の例が r である。Skt. で ‘idam avocad bhagavān | āttamanā rājā māgadhaḥ ...’ とある個所の āttamanā が, F では2重に訳されている。これは, まず āttamanā が直前の文にかかるものとして ‘dges sin’ と訳され, その後訂正されて ‘yid rañ te’ と次の文に置かれたが, 誤訳の前者がそのまま残された結果, 2重の翻訳になったと推測できる。Tib.1 では ‘yid rañ te’ のみで, F の読みがさらに訂正されたものとも考えることもできる。これらからは, F

(166)

Bhavasamkrāntisūtra のフダク写本 (津 田)

	Skt. (Vinīta (2010))	Tib.1 (L, P, C, S, D, N, T, U, H)	Tib.2 (F)
a	brahma-caryaṃ (p. 416.4)	tshañs par spyod pa (This sentence is put at a different place from the other two.)	tshañs par spyod pa
b	mahatā rāja-rāddhyā mahatā rājānubhāvena (p. 416.6-7)	rgyal po'i 'byor ba chen po dañ rgyal po'i mthu chen pos	om.
c	kalandaka-nivāso (p. 416.7-8)	om.	ka lan 'da' ka gnas pa
d	manasaḥ (p. 418.2-3)	yid la	om.
e	yaḥ svapnāntare bhuktāṃ jana-pada-kalyāṇīṃ striyam anusmaret tataś cāsyāḥ pratiharṣaṇam (p. 422.6-8)	'o na gañ rmi lam gyi yul gyi bud med bzañ mo la mñon par zen pa'i	gañ gñid kyis log pa'i rmi lam na skye bo bzañ ma bud med dañ 'grog pa rmi pa las dran par gyur pa
f	bālo (p. 424.1)	byis pa	om.
g	-daurmanasya- (p. 426.1-2)	om.	om.
h	abhinivīṣate so 'bhiniṣṭaḥ sann anuñyate anuñṭaḥ saṃrajyate saṃraktaḥ (p. 426.2-3)	gzugs rnams la mñon par zen te mñon par zen par gyur nas rjes su chags par 'gyur ro rjes su chags nas kun tu chags par 'gyur ro kun tu chags nas	mñon par chags nas
i	manasi (p. 426.5)	om.	om.
j	tat-sabhāgasya karmaṇaḥ kṣayāc (p. 428.4)	de dañ skal ba 'dra ba'i las zad nas	om.
k	-bhavikaṃ (p. 428.8)	om.	om.
l	prakṛti-viviktatvāt sarva-dharmānām (p. 432.6)	ño bo ñid dañ bral ba'i phyir ro	rañ bzin gyis dben pa'i phyir ro
m	om. (p. 432.8)	las ni las kyis stoñ	las kyañ las kyis stoñ
n	tat-sabhāgāvicalā (p. 434.2)	ma chad par	om.
o	karmanām (p. 434.3)	om.	om.
p	tattva- (p. 442.4)	yañ dag	thams cad
q	na gāhate (p. 444.5)	mi dpogs so	dpog mi nus
r	[āttamanā] (p. 446.1)	[yid rañs te]	dges śiñ . . . [yid rañ te]
s	sā ca sarvāvatī parṣat (p. 446.2-3)	om.	om.

にあまり改訂が加えられていない様子がかがえる。さらに F には決定訳語にない翻訳もみられる。Magadha と Śreṇya (Śreṇika) がそれぞれ mñam dka', mkhas ldan とされ、Tib.1 の ma ga dha, bzo sbyaṅs と異なる。また 6 箇所ある janapada-kalyāṇī も、F では skye bo bzañ po'i (mo'i/mo/ma) bud med であり、Tib.1 の yul gyi bud med bzañ po という決定訳語に沿ったものとは異なる。このように、誤訳が残っていた

り決定訳語にない翻訳があるという点では、Fは決定訳語による改訂をうけていない可能性もあろう。

Skt. に関しては特殊な読みが多く、g, i, k, l, m, n, o はチベット訳2本のみならず、漢訳や引用典籍のほぼいずれにもない読みである。

Tib.1 に関しては、3者間で特殊な読みが最も少ないといえ、決定訳語による改訂も含め、さまざまな要素を勘案して校訂が重ねられた翻訳であると想定できる。

4. まとめ

以上、BhSSの3本のテキストと漢訳、引用テキストとの比較を通して、大蔵経に伝わる現行本 Tib.1 には、さまざまな訳文改訂が重ねられた可能性が指摘できる。ブダク本には多少の誤訳が認められ、Tib.1 の祖形を示すような個所がある。また決定訳語にない翻訳もみられる。これらの点でブダク本は、あまり改訂がなされていない初期の翻訳を保持しているといえよう。それが原文としてオリジナルに近いものかどうかは明言できないが、現存サンスクリットとは異なるテキストであり、大正577に近いものといえる。

-
- 1) 先行研究に関しては：津田 (2013) p. 134.17-20, 津田 (2014) p. 104.8-13. その他, Stramigioli (1937) はチベット訳の1写本からの転写を掲載する。これは後述の Tib.1 と同じテキストである。本稿入手に際しては林玄海氏のご協力をいただいた。記して感謝したい。
- 2) プトゥン仏教史の目録部に記載される本経は Ye śes sde 訳とあるので、この翻訳を指したものと考えられる。そのほかデンカルマやパンタンマにも本経の記載があるが、翻訳者名は記されない。3つの目録いずれでも本経は 70 śloka とされ、いずれも散文部分と偈頌部分のそろったものであったと推測できる。津田 (2014) p. 108, notes 21, 22.
- 3) Vinītā (2010) pp. 420-434. 4) de La Vallée Poussin (1907-1912) pp. 127.17-129.17. 5) de La Vallée Poussin (1903-1913) p. 137.5-8. 6) P 5259, za 156r2-4; D 3859, za 127v7. 7) Bendall (1902) pp. 252.3-253.14. 8) 本書および作者に関して：上山 (1984). 「故転有経云。業者作已滅壞。…雖然而業不失。」(大正 2816, p. 1182.b21-29) が *tac ca karmābhisamskṛtam . . . karmaṇām cāvipraṇāśaḥ prajñāyate* / に相当。Vinītā (2010) p. 427, note a に指摘があるも訂正が必要。
- 9) Vaidya (1960) pp. 224.20-225.9. 10) (1v2) *sati hi nirodhe 'nāgata-bhavōpavartanād "iti hi mahā-rāja carama-vijñānam nirudhyate / prathama-vijñānam anupapatty-amśikam upapadyata" ity-ādinā /*. 当該フォリオはこれまで未発見であったが、近年その存在が確認され、現在葉少勇氏や加納和雄氏らを中心に校訂テキストが準備されている：Ye et al. (2013) pp. 36.25-37.23.
- 11) チベット訳では経典からの引用とするが、漢訳では論書からの引用とする点には注意が必要である。大正蔵では「如是等真實意樂説已如順。有論頌言」(大正 1517, p. 911.c17) となっている。ちなみに、これを「如是等真實意樂説已。如順有論頌言」と読

み、引用典籍名を『順有論』と解することはできないかというご指摘を、早島慧氏よりいただいた。この『仏母般若波羅蜜多円集要義釈論』(大正 1517)も『大乘破有論』も施護による翻訳であるが、施護は前者では本文を偈頌として訳し、後者では本文全体を偈頌として訳していない。それゆえ施護は両者が同一の典籍であることに気づいていなかった可能性がある。「有論頌言」とした場合は典籍名なしでの引用となるが、「如順有論頌言」と読んだ場合は、『順有論』が『大乘破有論』の別名である *Bhavasamcara* の翻訳である可能性(津田(2013) p. 137.4-5)を考慮した方がいいのかもしれない。 12)

a) 大正 575, 576: om. ; 大正 577, p. 949.c25 : 梵行 (Skt. に一致). b) 大正 575, 576, 577: om. c) 大正 575, p. 984.c1 : 迦蘭陀…精舍 ; 大正 576, p. 949.a26 : 迦蘭陀…住处 ; 大正 577: om. d) 大正 575, 576, 577: om. e) *Śkṣ*, p. 252.6-7: yaḥ svapnāntare jana-pada-kalyāṇiṃ striyam anusmaret tathā vā sārđhaṃ krīḍitam abhiniveśet | ; *MAVbh*, p. 420, note a.5-6: yaḥ svapnāntare jana-pada-kalyāṇa-striyā sārđh*am paricaret* | sa śayita-vibuddhas tāṃ* jana-pada-kalyāṇiṃ* striyam anusmaret | ; *MAVbhT*, pp. 128.20-129.2: gañ rmi lam gyi yul gyi bud med bzañ mo dañ lhan cig spyod pa rmis la | de ñal ba las sad nas yul gyi bud med bzañ mo de dran pa'i ; 大正 575, p. 948.c7-8 : 夢中見姝女。与諸人等共相娛樂。覺已憶念。 ; 大正 576, p. 949.b6-7 : 若執夢中女 ; 大正 577, p. 950.a10 : 於彼夢中所見美女。心生憶念恋慕不捨. f) *Śkṣ*, p. 252.11; *MAVbh* p. 424, note a.1; *BCP*, p. 224.20; *PP*, p. 137.5: bālo; *MAVbhT*, p. 128.8: byis pa ; 大正 575, p. 948.c12 : [凡夫] ; 大正 576, p. 949.b9-10 : 愚癡 [凡夫] ; 大正 577, p. 950.a15 : 愚癡 [無識凡人]. g) *Śkṣ*, *MAVbh*, *MAVbhT*, *BCP*, *PP*, 大正 575, 576, 577: om. h) *Śkṣ*, p. 252.11-12: abhiniviśet | so 'bhiniṣṭaḥ sam*anunīyate 'nunītaḥ saṃrajyate | saṃrakto; *MAVbh*, p. 424, note a.3-4: abhiniviśate so 'bhiniṣṭaḥ so 'bhiniṣṭaḥ saṃ*rāgam utpādayati | cakṣuḥ; *MAVbhT*, p. 128.10-11: mñon par žen te | mñon par žen par gyur nas chags pa skyed par byed do || chags nas; *BCP*, p. 224.21-22: abhiniviśate | so 'bhiniṣṭaḥ samanunīyate | samanunītaḥ saṃrajyate | saṃrakto; *PP*, p. 137.6-7: abhiniviśate | so 'bhiniṣṭaḥ saṃ*rāgam utpādayati | raktaḥ ; 大正 575, p. 948.c12-13 : 便生愛著。既生愛著便起欲心。既起欲心 ; 大正 576, p. 949.b11-12 : 即執為実。以執著故則有繫縛。以繫縛故則有染著。以染著故。 ; 大正 577, p. 950.a16-17 : 便起執著。起執著已隨生顧恋。生顧恋已情懷染愛。起染愛故. i) *Śkṣ*, *MAVbh*, *MAVbhT*, *BCP*, 開, 大正 575, 576, 577: om. j) *Śkṣ*, p. 252.16: tat-sabhāgasya karmaṇaḥ kṣīṇatvāc; *MAVbh*: om.; *MAVbhT*, p. 128.16-17: de dañ skal ba 'dra ba'i las zad nas; *BCP*, p. 224.26: tat-sabhāgasya karmaṇaḥ kṣīṇatvāt ; 開 : om. ; 大正 575, p. 948.c18-19 : 自作之業必尽 ; 大正 576, p. 949.b16 : 隨業尽处 ; 大正 577: om. k) *Śkṣ*, *MAVbh*, *MAVbhT*, *BCP*, *CSS*, 開, 大正 575, 576, 577: om. l) *Śkṣ*, p. 253.11-12: svabhāva-virahitatvāt; *MAVbh*, p. 434, note a.5: prakṛti-viviktatvāt sarva-dharmāṇaṃ; *MAVbhT*, p. 129.12: rañ bzin dben pa'i phyir ro; *BCP*, p. 225.6: svabhāva-virahitatvāt ; 開 p. 1182.b27 : 自性寂故 ; 大正 575, p. 948.c26 : 識性離故 ; 大正 576, p. 949.b24 : 法性相故 ; 大正 577, p. 950.a29 : 本性空故. m) *Śkṣ*, p. 253.12: karma karmaṇā śūnyam. | ; *MAVbh*, p. 434, note a.7: karma karmaṇā śūnyam; *MAVbhT*, p. 129.14-15: las ni las kyis stoñ ño || ; *BCP*, p. 225.7: karma karmaṇā śūnyam ; 開 p. 1182.b28 : 業自空 ; 大正 575: om. ; 大正 576, p. 949.b25 : 業是業空 ; 大正 577, p. 950.b1 : 業業性空. n) *Śkṣ*, *BCP*: om. ; 大正 575, p. 948.c29 : 不斷 ; 大正 576, p. 949.b27 : 不斷 ; 大正 577: om. o) *Śkṣ*, p. 253.13:

karmaṇāṃ?; BCP: om.; 大正 575: om.; 大正 576, p. 949.b28: 業 [報] ? ; 大正 577: om. p) 大正 575, p. 949.a10: 一切 [凡夫]; 大正 576, p. 949.c5: 法眼? ; 大正 577, p. 950.b14: 諸世間 (sattva-?). q) 大正 575, p. 949.a15: 非…所覚; 大正 576, p. 949.c11: 我慢説; 大正 577, p. 950.b19: 不能知. r) 大正 575, p. 949.a18: [大歡喜]; 大正 576, p. 949.c14: [大歡喜]; 大正 577, p. 950.b22: [大歡喜]. s) 大正 575, p. 949.a17: 一切? ; 大正 576, p. 949.b13: 諸大衆; 大正 577, p. 950.b21: 衆? .

〈一次文献〉

Bendall, Cecil (1902) *Çikshāsamuccaya*. St. Pétersbourg: Comissionnaires de l'Académie Impériale des Sciences (CAIS).

de La Vallée Poussin, Louis (1903–1913) *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*. St. Pétersbourg: CAIS.

de La Vallée Poussin, Louis (1907–1912) *Madhyamakāvātāra par Candrakīrti*. St. Pétersbourg: CAIS.

Stramigioli, Giuliana (1937) “Bhavasamkrānti.” *Rivista degli Studi Orientali* 16 (3/4), pp. 294–306.

Vaidya, P. L. (1960) *Bodhicaryāvātāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

Vinītā, Bhikṣuṇī (2010) *A Unique Collection of Twenty Sūtras in a Sanskrit Manuscript from the Potala*. Vol. I-2, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press.

〈二次文献〉

津田明雅 (2013) 「Nāgārjuna に帰せられる *Bhavasamkrānti* について」『印仏研』62 (1), pp. 134–139.

津田明雅 (2014) 「*Bhavasamkrānti* の成立年代について」*Acta Tibetica et Buddhica* 7, pp. 103–138.

上山大峻 (1984) 「敦煌における因縁論の諸相」『仏教学研究』39/40, pp. 50–86.

Ye Shaoyong, Li Xuezhu, and Kano Kazuo (2013) “Further Folios from the Set of Miscellaneous Texts in Śāradā Palm-leaves from Zha lu Ri phug.” *China Tibetology* 1, pp. 30–47.

〈キーワード〉 *Bhavasamkrāntisūtra*, 『転有経』, ブダク写本, Nāgārjuna

(京都大学大学院修了, 博士 (文学))